

書評

木村謙太郎・石原 享介 編

在宅酸素療法—包括呼吸ケアをめざして

松村 理司（市立舞鶴市民病院副院長）

木村謙太郎、石原享介両先生の編集になる在宅酸素療法に関する本書を通読し、久しぶりにすがすがしい気分にならせていただいた。書き手は、本の性格上、医師、看護教育者・看護婦、理学療法士、保健婦、ソーシャルワーカーと多種に及ぶが、その主体ははたつとした在野の勢力である。何よりも、教科書的な知識の羅列ではなく、実践に支えられた確かな知恵や主張に満ちている。記述も具体的でわかりやすいし、データの多くが自前なのでとても説得的だ。だから、「生物学的アカデミズム一辺倒」どころか、「包括呼吸ケア」という言葉が少しも不自然に響かない。

「20世紀末の岐路に立って、私たちは進歩する世界を信じていることができるのだろうか。……」本書の序での木村先生の出だしには、医療の本なのに思わず居住まいを正させられた。続く第1章での在宅酸素療法の歴史の記述も、詳しいだけでなく、問題提起に満ち、思索的だ。文章も格調高く、先生の気概が色濃く漂う。

全体で11章からなっており、どの章も示唆に富ん

でいるが、第7章での長谷川幹・石原享介両先生のさまざまな指摘が、臨床医である筆者にはとりわけ印象深かった。「在宅療法＝善という単純な価値観だけで在宅酸素療法を展開してはならない」のは、妥当な戒めだと反省させられる。阪神・淡路大震災という不幸な経験に基づく考察も一読に値するが、確かに「被災地へ駆けつけたボランティアの数の多さは、うれしい誤算である」。

あとがきで石原先生は、「在宅医療の主役が、医師からさまざまなコメディカル、福祉関係者に移った」と述べられる。望ましい傾向だが、先生自身が「少数にすぎなくなった医師」のど真中に位置しておられる姿は、誠に心強い。

昨秋亡くなられた中川米造先生は、「医療は narrative (物語) です。単なる生物学や科学ではありません」とよくおっしゃった。医療の豊かさをひたすら求められた先生らしい言葉だ。在宅酸素療法が「物語」であることを、本書は随所で教えてくれる。
(B5 頁168 定価(本体4,200円+税) 1997 医学書院刊)